

青山学院大学文学部日本文学科編

『文学という毒  
—諷刺・パラドックス・反権力—』

笠間書院 2009年4月刊 1,575円

〔評者〕大屋 多詠子



本書は二〇〇七年九月に本学大学文学部日本文学科で行われた国際シンポジウム「文学という毒—江戸の奇想はこうして生まれた—」の記録である。

「文学という毒」という題が示すところは副題「諷刺・パラドックス・反権力」に明らかであるが、その表紙の意匠に用いられた歌川国芳の浮世絵「相馬の古内裏」も象徴的である。この浮世絵は平将門の遺児、滝夜叉姫がその妖術で巨大な鬨を現出させて勇者大宅光国を試すという話に基づく。父の遺志を継ぎ、時の権力に叛逆を企てる滝夜叉姫の妖術は本テーマの表徴としてふさわしい。

本書の構成は三部から成る。  
第一部は、歌舞伎界を代表する十二代目市川團十郎丈と本学大学前学長の武藤元昭氏の対談で、「歌舞伎の毒と悪をめぐって」と題して、歌舞伎狂言における毒薬の趣向のこと、「傾く」精神や怨霊・悪霊退治を基本とする荒事の持つエネルギーが庶民には良薬ともなり、為政者にとっては毒ともなるといったことが、團十郎丈の実感を伴って語られている。

第二部はシンポジウムで、富山太佳夫(大学文学部英米文学科教授)、マイケル・ガーディナー(ウォリック大学)、高山宏(明治大学教授)、長島弘明(東京大学教授)、大上正美(大学文学部日本文学科教授)、篠原進(大学文学部日本文学科教授)の各氏の基調講演、第三部では各氏に対するフロアからの質問に対する応答を収録している。

富山太佳夫氏は、江戸時代中期にイギリス

で書かれた『ガリヴァー旅行記』は当時の政治制度を諷刺したものであることを、ガーディナー氏はスコットランドのミュリエル・スパークという作家の第二次大戦後の作品を取り上げ、そのユーモアについて論じる。高山宏氏は、江戸時代初期にイギリスのロバート・パートンが書いた『憂鬱の解剖』という書を題材に、パラドックスの文学について語る。

長島弘明氏は、江戸時代中期の作家、上田秋成が発憤著書説を信奉し、憤りから文学を書くという姿勢を貫き、虚構を以て「毒」を隠したことを、大上正美氏は三世紀に刑死した中国の文学者、孔融・嵇康の政治批判の「言志」の精神について、篠原進氏は江戸時代前期の井原西鶴や都の錦という作家による浮世草子を例にレトリックに隠された「毒」について語る。

英中日の専門家による各講演・質疑は、極めて専門的な内容でありながら、古今東西の「毒」たる文学の意味、普遍性を訴えかけて、幅広い読者の知的好奇心を呼び覚ますに違いない。

本学科では二〇〇四年度から上代、中古、中世、近世、近代文学の各分野で国際シンポジウムを開催してきた。近世文学に主眼をおいた第四回の記録が本書である。他の各回の記録もそれぞれ一書にまとめられている。本学科のHPでも紹介しているので、御関心のおありの方は是非ご覧頂きたい。

(大学文学部日本文学科准教授)